

# 若い女性の「フェミニズム離れ」 をどう読み解くか

## ——#WomenAgainstFeminism (2013-2014) の分析から——

武蔵大学・関東学院大学ほか非常勤講師  
高橋幸 (TAKAHASHI Yuki)

## 報告者の問題関心と目的

●2000年代の日本のバックラッシュとは何であったのかを反省的に再考する仕事が、2010年代になって出てきている（山口智美・斎藤正美・荻上チキ, 2012, 『社会運動の戸惑い：フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』）、石橋, 2016, 『ジェンダー・バックラッシュとは何だったのか：史的総括と未来へ向けて』など）。

→報告者は、バックラッシュが当時（とその後）の若い女性に与えた影響について研究したい。

●英米では、1980年代にバックラッシュが起こり、1990年代にポストフェミニストに関する研究が行われてきた。

→英米のポストフェミニズム研究を参照しながら、日本の「ポストフェミニスト」とポストフェミニズム的社會現象（=「保守化」）について、考察したい。

## 目次

### 1. 「女性のフェミニズム離れ」に関する英米の調査結果の概観

- (1) ポストフェミニズムとは何か
- (2) 若い女性の「保守化」を示すデータ
- (3) 「フェミニズム離れ」に関する調査結果

### 2. # WomenAgainstFeminismの分析結果

●本報告の目的：2010年代の英語圏における「フェミニズムは不要である」と主張する女性たちの主張内容を明らかにする。

## 1(1) フェミニズム離れ=「ポストフェミニズム」（1）

The Women's Movement Today: An Encyclopedia of Third-Wave Feminism (Heywood et.al. 2005)  
によると、

**【1】**この言葉が使われ始めた90年代には、アンチフェミニズム派によって、「フェミニズムがもはや不要になった時代」という意味で用いられた。

- ・早い時期の使用例として、例えば、Susan Bolotin, 1982, 「Voices of the Post-Feminist Generation」『ニューヨーク・タイムス・マガジン (New York Times Magazine)』
- ・Bellafante Ginia, 1998, 「Is Feminism dead?」『タイムマガジン (Time Magazine)』  
(29, June 5)

**【2】**フェミニズムを支持する人の間でも、フェミニズムに対する態度の調査研究が蓄積されていくなかで、「**フェミニズムから距離をとる若い女性たち**」をカテゴライズするための言葉 (=「ポストフェミニスト」) として用いられるようになっていった。

**【3】**その他、フェミニズム内において、**現在のフェミニズムを批判するフェミニスト**をカテゴライズするための言葉。おもにフェミニストが用いる自称及び他称にもなっている。

例：カミーユ・パーリア (1947-) , Christina Hoff Sommers (1950-) , Nadine Strossen (1950-) , Katha Pollitt (1949-) , Amelia Jones (1961-)

本報告では【2】を重視し、【2】の意味で用いる。

1(1)

## 「ポストフェミニズム」（2）

ポストモダニズムやポストコロニアリズムの研究者が、ポストフェミニズムという語を使うケースも。

- ・日本では、**竹村和子**の「“ポスト”フェミニズム」（2003）など。
- ・この場合の「ポスト（post）」とは、モダン（近代）やコロニアリズム（植民地主義）が「終わった」ことを意味するというよりも、**それらが新しい権力関係や資本、メディア、技術の中で、新しい段階に至ったことを指し示すもの**。

→この用法を踏まえれば、ポストフェミニズムというパースペクティブをとることで、**第二波フェミニズムの議論を踏まえながら、新しい資本とフローバル化（新自由主義的権力）のなかでのジェンダー編成のあり方**を捉えることも可能に。

ただし、本報告者は、議論が拡散することを避けるため、

- ポストフェミニスト**=第二波フェミニズムから距離を取る人々のこと、
- ポストフェミニズム**=第二波フェミニズムから距離を取る女性をめぐる社会現象と定義して、以下、議論を進めていく。

1(1)

## 「ポストフェミニズム」 (3)

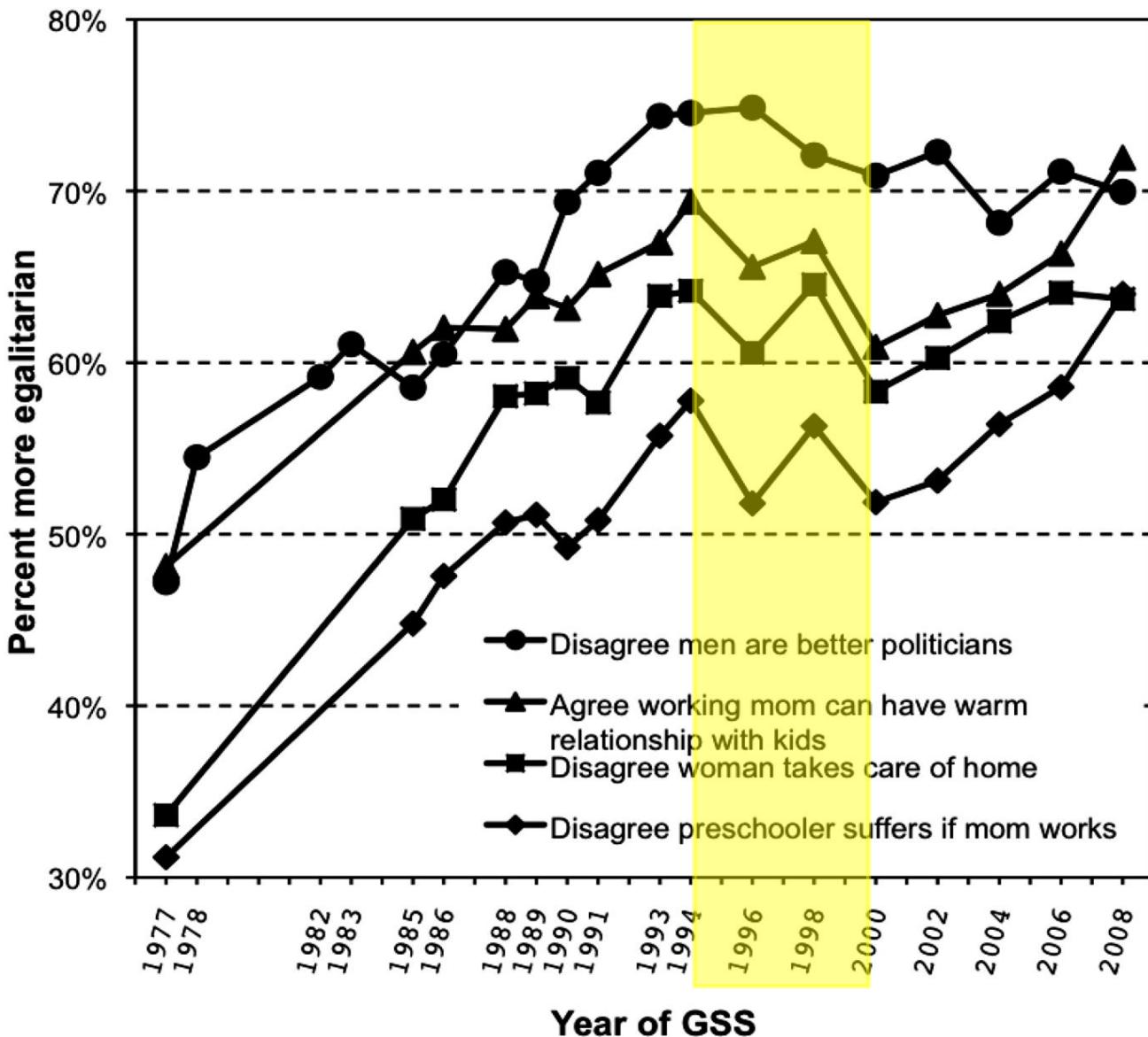
【表 - 1 「フェミニズム」、「アンチフェミニズム」、「ポストフェミニズム」の違い (Jordan 2016) を参考に高橋が作成)】

	フェミニズム	アンチフェミニズム	ポストフェミニズム
規範：ジェンダー平等 は望ましい目標	○	×	○
認識：現代社会においてジェンダー不平等 がある	○	○	×
実践：集合的・政治的なジェンダーポリティクスが必要	女性が不利益を 被っている	男性が不利益を 被っている	ない

\* ジェンダー問題を脱政治化し、個人の問題と捉えるのがポストフェミニズム

1(2)

## バックラッシュ後のアメリカの「保守化」に関する議論 ：ジェンダー平等志向の停滞（1995 - ）



【図表2 GSSデータに見るジェンダー態度の変化：1977-2008年（Cotter et al.2011:261より引用）】

「強く同意と同意、強く不同意と非同意を足しあわせている。「わからない」は、「非平等主義（not egalitarian）」にコード化されている。

## 1(2) アメリカのバックラッシュ後の ジェンダー平等志向の停滞 : Cotter et al.2011によれば、

General Social Survey (アメリカ合衆国の居住者で18歳以上の成人が対象) を分析したCotter et.al., (2011) によると、**1995年以降、ジェンダー平等志向の停滞 (stagnation) や逆転 (reversal) が見られる**

- ・ベビーブーマー世代以降コーホート間の差異は小さくなっている、95年以降、コーホート置換によるジェンダー平等志向がもたらされなくなっている。
- ・1995年以降、ほとんどすべてのコーホートの男女、すべてのエスニシティ (アジア系アメリカ人を除く) 、すべての教育レベルと所得レベルの層において、**ジェンダー平等志向の停滞**が見られた (Cotter et al.2011:260) 。

→すべてのコーホートが影響を受けるような社会文化的な構造的な変化があつたと考えられる。

具体的には… (次ページ)

## 1(2) バックラッシュ後のアメリカのジェンダー平等志向の停滞 : Cotter et al., 2011によれば（続き）

具体的には、

- 1) 「ポピュラーカルチャーにおけるアンチフェミニスト・バックラッシュ」  
(Cotter, et al. 2011:260) と、
- 2) 1990年代後半の男性の所得 (men's earnings) の上昇による、妻の労働力化圧力の低下
  - ・アメリカでは、1960年代以降はじめて1990年代後半に、男性の所得上昇が家族世帯所得の中央値を押し上げており、それゆえ、母親の子育てが再度強調されたと考えることができる (ibid, 264)。→90年代アメリカでは、「母性神話 (Mommy Myth)」や、“intensive motherhood”(Hays 1996)などが流行語に。
  - ・原理主義やエバンジェリカンは、保守的なジェンダーイデオロギーを支持していることが知られているが、GSSデータによれば、これらの宗教的な変化はゆっくりとしたものであり、1990年代の回転 (turn around) を説明するものとはなりえない (ibid, 263)。
  - ・1970年代から80年代には、人口全体の教育レベルの上昇が平等主義傾向を促していた。しかし、1990年代はゆっくりではあるが教育レベルが上昇し続けているのにに対して、平等主義傾向は逆転した。教育レベルとジェンダー平等志向は運動しなくなっている (ibid, 263)

1(3)

### 「フェミニズム原理を支持する人」の割合と 「フェミニストと自称する人」の割合の乖離

●1997年（9月18日 - 20日）のCBSニュースの世論調査では、

- ・すべての年齢の女性の3／4が「女性の地位は過去の25年間に改善した」と答えたが、
  - ・自らをフェミニストであるとしたのはおよそ1／3
- この乖離をボクサー（1997）は「**フェミニスト**」という語の多義性によるものと分析。

ちなみに、CBSニュース世論調査によれば、「あなたは自分自身をフェミニストだと考えますか（Do you consider yourself to be a feminist or not?）」という質問に対し、「はい」と答えた人の割合は、1992年に21%、1997年26%、1999年20%、2005年24%、2015年38%。

\* 「フェミニズム離れ」と一口に言っても、

- ・フェミニズム原理は支持しているがフェミニストとは自称しない人や
- ・フェミニズムに対して曖昧な態度をとる人など、多様性がある

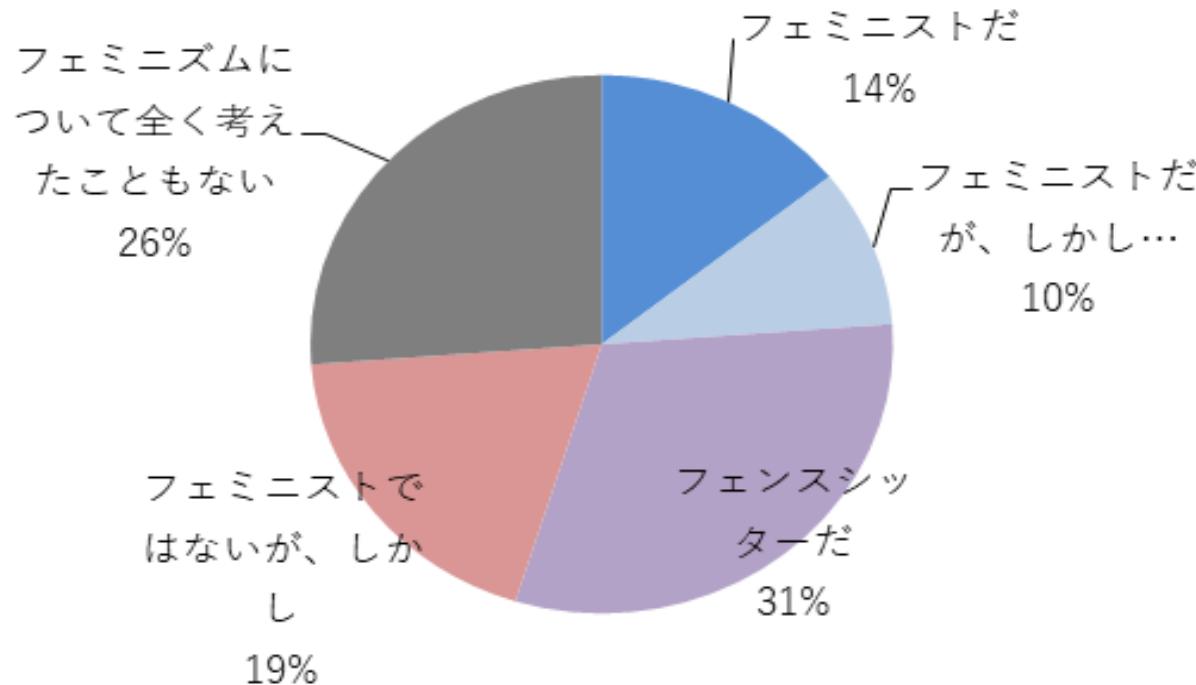
したがって、フェミニズムに対する態度や見解を丁寧に見ていく必要がある。

1(3)

### Aronson (2003) の調査によると、

アメリカの「若い女性」（1973年生まれのミネソタ州セントポールの9年生のリストからランダムサンプリングした1000名に対して、1988年から1995年までパネル調査を実施。1996-97年に、そのなかの40名（調査時23-24歳）に対するデプス・インタビュー（調査対象者には33%の有色人種を含み、出身階級別にみると、労働者階級31%、ミドル階級48%、アッパーミドル階級21%）

【図表3 フェミニズムに対する態度（アロンソン（2003）を参考に作成）】



→フェミニズムに対して「あいまいな態度」を取る人の割合が多いことが明らかに

## 1(3) どの点で、なぜ、フェミニズムから距離をとるのか

### 【フェミニストと同一視されることへの違和感】

- ・「私は強くフェミニストだと断言できるが、しかし私はつねにフェミニズムの見方を主張し続ける (assert) ような人間ではない」（I'm a feminist, but…, Aronson 2003:915）
- ・ I'm not a feminist, but… 「自分自身は女性であることを理由に差別にあったことも、周りの人が差別にやっているのを見たこともない」（ibid, 915-6）。ただし、この層もまた基本的にフェミニスト・イデオロギー（平等賃金や女性の経済的自立、女性の性的自由、リプロダクティブ・ライツなど）については支持を表明する場合が多い。

### 【男性との関係性を顧慮】 フェミニズムは男性との関係を悪くするという理解に基づき、それは嫌だという主張

- ・「私は男性を遠ざけるよう (alienate) な人間ではない」（ibid, 915）。
- ・彼女たちは男女の平等賃金、女性の経済的自立、性的自由や妊娠中絶権の支持といったフェミニズム・イッシュはサポートするが、フェミニズムに対するアンビバレン特な態度を持っており、「男性を嫌いたくない」と述べ、男性への敵対性を作り出すことに困惑するので、フェミニストと言われることを拒否（フェンスシッター, ibid, 915）。

## 2 #WomenAgainstFeminism（#WAF）の分析

- ・2013年から2015年にかけて英語圏を中心に生じたハッシュタグ・アクティビズム（ハッシュタグ・ムーブメント）。2014年夏に、ブロガー、ジャーナリストなどがとりあげたことで盛り上がった。
- ・「フェミニズムに反対する理由」を書いた手書きのメモをもって撮影したセルフィ（自撮り写真）を、#WomenAgainstFeminismというハッシュタグをつけて投稿。
- ・本論文が分析したのは、Tumblr「Women Against Feminism」の「アーカイブ」に蓄積された写真群（すべてで1000枚以上ある）のうち、以下の基準でスクリーニングしたもの。
  - (1) 女性と思われる人物が自分の顔か、もしくは身体の一部を写している
  - (2) 「フェミニズムが必要ない理由」を書いた手書きのメモを持っている
  - (3) セルフィ

→合計139人分（計142枚、1名は3枚の写真を、もう1名は2枚の写真を連続投稿して長文のメッセージとしていたため）を収集できた。

この写真は、一切の個人情報がクリーニングされているため、以下のようなことは不明。

- ・投稿した場所、投稿者の居住国・地域、投稿者が当該ハッシュタグ付き写真をインターネット空間上のどこに投稿したのか（Facebook、Twitter等）は不明。
- ・正確な年齢も不明。ただ、セルフィであるという特性により、外見からある程度の年齢を推測することはできる。それによると、10代後半から30代くらいの若い層に偏っている。学歴、職業等の属性についても不明。
- ・エスニシティ：ある程度の肌の色はわかるが、宗教は不明。

\*セルフィを自宅・自室と思われるファッショングや室内の雰囲気といった外見からわかる情報は多いが、外見からわかる情報しかわからないというのが、この資料体の特徴。

# 分析結果

【表－2 「私がフェミニズムを必要としない理由」のコーディング結果】

コード	全体に占める割合（個数）		
1 家庭生活重視	11.2% ( 37)	性別役割重視	19.4% (64)
2 恋愛・セクシュアリティ重視	8.2% ( 27)		
3 「女性」でなく「個人」	38.7% (127)	「個人」主義	47.8% (157)
4 平等主義	9.1% ( 30)		
5 フェミニズムイデオロギー批判	28.3% ( 93)	アンチ・フェミニズム	32.6% (107)
6 男性問題に言及	4.2% ( 14)		
計	100% (328)		

- 1-4は、あくまでも自分の「女性」としての日常感覚や経験に基づいて、主張を行うポストフェミニズム的な主張。
- 5-6は、政治的・イデオロギー的にフェミニズムを批判するアンチフェミニズム的な主張。

# ポストフェミニストの特徴（1）

## 【「個人」主義】

- ・自分は「抑圧された（oppressed）」「犠牲者（victim）」ではない。「フェミニズムに私の声を代表・表象（represent）してもらう必要はない」
- ・自分がブレッドウィナーで、私と夫は互いにリスペクトしあっている。
- 学校や職場、地域コミュニティといった自分が生きている**社会的領域のなかでの男女平等な待遇**を当然のものとし、**それはすでに実現されている**という現状認識。→だからフェミニズムは不要。
- 「『弱者』『犠牲者』としての女性」という「フェミニストが言う女性像」に一括りにされることへの反発が、この主張の感情的基盤になっている。

## 【性別役割重視】

- ・「仕事から帰ってきたボーイフレンドのために料理を作ることは、私らしくなくなることではない」、「私は女らしい（feminine）ファッションが好きで、女らしくありたいと思っている」、露出の多い服装で身体の一部を強調したセルフィにおいて「こういう格好をしたときに見てくれる人が必要」、「私はレイプサバイバーだが、男性を嫌っていない」。
- 家庭生活や恋愛関係において「女性ならではの役割」や「女らしさ」を楽しみたいという主張を持っているが、このような見解がフェミニストによって批判されていると思い込んでいるがゆえに、「フェミニズム」に反発。

## 分析から得られる知見：ポストフェミニストの特徴（2）

- 1) **社会的領域**において、自分が「女性」であるという理由で不利な扱いを受けないこと（**ジェンダー中立的な待遇**）を当然視（＝「個人主義」）。→フェミニズム不要。
- 2) 社会的領域でのジェンダー中立性が実現している以上、日常生活において「女であること」を意識したり、それが問題になったりするのは、家庭や恋愛、性愛といった個人的領域においてのみということになる。
- 3) **個人的領域**においては、「女性ならではの役割」や「女らしさ」を楽しみたいという主張を持っている（＝性別役割重視）。→だが、このような主張内容がフェミニストによって批判されていると思い込んでいるために、フェミニズムに反対。

●ポストフェミニストは、性別によって社会的に不利な扱いを受けないことと、女らしさの享受の両方を「当然のもの」として要求している（もしくはすでに実現されると認識している）。

## 分析に基づく考察

●ポストフェミニストによる性別によって社会的に不利な扱いを受けないことと、女らしさの享受の両方の実現という要求は、多くのフェミニズム親和的な女性たち（フェミニスト）の要求と齟齬しないのではないか。

・例えば、#MeTooは、「女性的魅力」の発揮（例えば、女優業）と、セクシャルハラスメントにあわずに職業生活を全うできるような社会的環境の両方を要求したもの。

→そうだとすれば、戦うべきは「女らしい」服装をしている女性にはセクハラに相当するような行動をしてもよいと思ってしまう「常識」や、女性的魅力を含む能力を用いて仕事をしている労働者（たとえば、性風俗産業従事者やアイドルなど）の権利保障が不十分であることを「仕方のないもの」「当然のもの」と思ってしまう「常識」なのでは。

## まとめ #WAFの分析から分かったこと

- 「フェミニズムに反対する女性たち」の主張の中で最も多かったのは、「自分は個人である」と主張する「『個人』主義」である。
- 性別役割重視のポストフェミニストも、「自分は個人だ（犠牲者ではない、抑圧されていない等）」と主張し、社会的領域における性別に基づく不平等な待遇は甘受しないという態度をとっている。つまり「女らしさ」を社会的に強制されることは嫌だが、自発的には「女らしさ」を楽しみたいと考えていると言い換えることも可能。
- ポストフェミニストたちが当然のものとして要求するジェンダー中立的な待遇と、女らしさを楽しむこと（女性的魅力の發揮）との両立は、フェミニズムが掲げる社会における性のあり方の理念とも大きく異なる。ポストフェミニストとフェミニストの間に、これまでの経緯に基づく感情的反発感はあるにしても、根本的な理念の点での決定的な対立はないのでは。

→では、**どの点で決定的に両者は対立しているのか？**（せざるを得ないのか）を明らかにするには、ポストフェミニストがフェミニズムに対して持っている「**強い不快感**」や「**込み入った複雑な感情**」について、さらに検討する必要あり。#WAFは短文での主張をメインとするものであるため、複雑な感情の機微までを捉えることはできなかつた。これは、今後の課題。

## 文献

- Alexander, Tin, 2018/8/22, "More millennial women are "feminists," though overall enthusiasm for the term remains low", CBS news, (<https://www.cbsnews.com/news/more-millennial-women-are-feminists-though-overall-enthusiasm-for-the-term-remains-low/> 2018/11/8閲覧)。
- Alfano, Sean, 2005/10/22, "Poll: Women's Movement Worthwhile", CBS news, (<https://www.cbsnews.com/news/poll-womens-movement-worthwhile/> 2018/11/5閲覧)
- Boxer Sarah, 1997, "One casualty on the women's movement: Feminism", New York Times, 14, December.  
(<https://www.nytimes.com/1997/12/14/weekinreview/ideas-trends-one-casualty-of-the-women-s-movement-feminism.html> 2018/11/5閲覧)
- Cotter, Hermsen & Vanneman, 2011, "The End of the Gender Revolution?: Gender Role Attitudes from 1977 to 2008", American Journal of Sociology, 117:259-289.
- Elaine J. Hall and Marnie Salupo Rodriguez, 2003, The Myth of Postfeminism, *Gender and Society*, Vol. 17, No. 6:878-902.
- Jordan, Ana, 2016, "Conceptualizing Backlash: (UK) Men's Rights Groups, Anti-Feminism, and Postfeminism", *Canadian Journal of Women and the Law*, vol. 28, No. 1:18-44.

- ・ 釜野さおり, 2013, 「日本の結婚と出生——第14回出征動向基本調査の結果から——（その1）1990年代以降の以降の結婚・家族・ジェンダーに関する女性の意識の変遷：何が変わって何が変わらないのか——」『人口問題研究』:3-41.
- ・ 菊地夏野, 2016, 「「女子力」とポストフェミニズム：大学生の「女子力」使用実態アンケート調査から」, 『人間文化研究』25号:19-48.
- ・ McRobbie, Angela, 1991, *Feminism and Youth Culture*, London: Macmillan Press.
- ・ ———, 2009, *Aftermath of Feminism*, SAGE Publications, London.
- ・ 水無田気流, 2009, 『無頼化する女たち』 洋泉社.
- ・ Pamela Aronson , 2003, “Feminists or “Postfeminists”? Young Women’s Attitudes toward Feminism and Gender Relations”, *Gender & Society* 17(6):903-922.
- ・ 石橋, 2016, 『ジェンダー・バックラッシュとは何だったのか：史的総括と未来へ向けて』 インパクト出版会.
- ・ 田中東子, 2013, 『メディア文化とジェンダーの政治学:第三波フェミニズムの視点から』 世界思想社.
- ・ 山田昌弘, 2009, 『なぜ若者は保守化するのか:反転する現実と願望』 東洋経済新報社.